Q 1-4 江戸時代の道路はどのようなものだったのですか？

江戸時代に入り、徳川幕府は東海道をはじめとする幕府直轄の「五街道」やその他の「脇街道」または「脇往還」を整備、管理するなど、全国的な道路整備を行いました。五街道とは、徳川４代将軍家綱の頃（慶安４～延宝８（1651～1680）年）に定められたもので、東海道、中山道、甲州街道、日光街道、奥州街道の５つを指します。

徳川幕府は、幕府と朝廷の関係維持、江戸防衛の観点から、五街道沿いには原則として天領・親藩・譜代藩を配置し、特に交通上重要な場所には関所や番所を置いて、単なる交通機能に留まらず幕府の政治・軍事機能を十二分に発揮できるよう配慮しました。

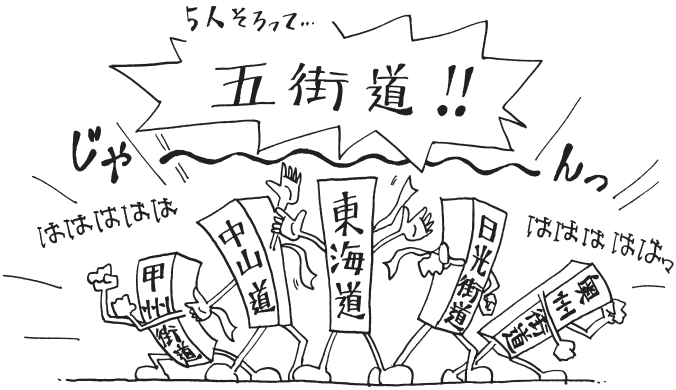
特に、東海道は将軍が住む江戸と天皇が住む京都を結ぶ幹線であること、参勤交代の大名が多く通行する表通りであるところから最も重要視され、その裏通りの中山道がこれに次ぐものとみなされました。

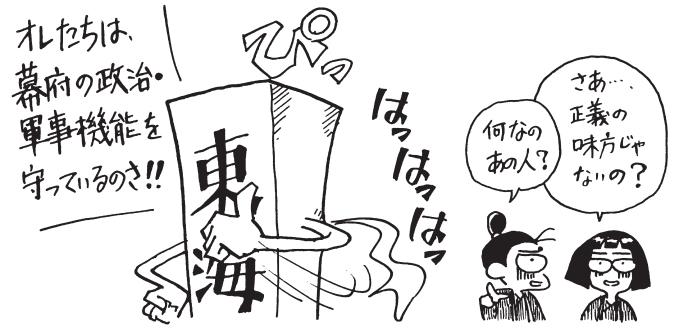
中山道（江戸～高崎～下諏訪～京都）は、その中間を木曽路ともいい、西は東海道の草津で合流しています。日光街道（江戸～日光）は、途中の宇都宮で奥州街道（江戸～白河）と分岐していました。また、甲州街道は、下諏訪で中山道と合流します。

なお、五街道が同時に掲載されている古い文献の例としては、延宝２（1674）年の『伝馬宿拝借錯覚』があります。これによると、五街道の宿は東海道は58宿（京～大坂間５宿を含む）、中山道は79宿、日光および奥州街道は44宿、甲州街道は35宿となっています。

東海道が慶長６（1601）年、中山道が慶長７年にでき、さらに日光・奥州街道が慶長７年から30年にかけて、甲州街道は慶長９年に江戸～甲府

株式会社建設技術研究所　http:/www.ctie.co.jp/
Copyright ⓒCTI Engineering Co., Ltd. All Rights Reserved.





間ができ、同15年に中山道の下諏訪まで延長されたといわれています。

五街道には、脇街道または脇往還と呼ばれる街道がつながっていて、本州中央部のかなりの地域を網羅していました。徳川幕府道中奉行である大目付や勘定奉行はそれまで諸藩が設けていた関所や番所を廃し、直接これらを配置することによって政治・軍事的影響力を強めていき、地方を支配していきました。

このころの五街道の道幅は、山道を除いておおむね3〜4間（約5.4〜7.2m）で、江戸に近いところでは5間（約9m）確保されていました。路線延長（距離）は、五街道で約1500km、五街道を含め幹線道路全体では約5000km、さらに地域的な街道を含めると合計で約1万5000kmが当時の街道ネットワークの延長とされています。

株式会社建設技術研究所　http:/www.ctie.co.jp/
Copyright ⓒCTI Engineering Co., Ltd. All Rights Reserved.